

ダーウィنزゲーム ～無名の王～

口十

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダーウィンスプレイヤーの中で、ちよつとした暗黙の了解がある。

「仮面の男を見たら報告しろ」というものだ。だが、こんな噂がある

「仮面の男はシギルをコピーする」と。

目次

ゲーム開始	1
対面	4
操られ人形	8

ゲーム開始

シユカとの激戦を終えた翌日。イヌカイに襲われた直後、ゲームの転送が始まった。

「宝探しゲームの前に・・・カナメ。一つだけ約束して」

「や、約束？ なんだよ」

「仮面の男に会ったらすぐに逃げて」

「仮面の男？ 分かった。気を付ける」

それを言うが早いか。景色は路地裏から一変、ホテルの一室に変化する。否、景色が変わったただけではなく、実際そこに移動したのだから。

途端、スマホの画面にこう現れた。

『シブヤの街に隠された宝を見つけ、一基に大量ポイントを得よう！ゲームの制限時間は24時間！参加プレイヤー300名は、全員バトルロイヤルモードに設定されるから、もちろん攻撃OK！』

ゲームに出現する「リング」はトパーズ・ペリドット・ラピスラズリ・ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンドの7種類。「リング」はゲーム終了後、それぞれ、以下のピントと交換されます。

もし、ゲームがクリア出来ずに制限時間が過ぎた場合、「リング」の所有数が3個未満のプレイヤーはゲームオーバーです。

「リング」は、地図と新機能「異次元カメラ」を使って探そう！（イベントエリア内では、プレイヤーサーチは無効化されます。また、イベント期間中にイベントエリア外に出た場合ゲームオーバーです。）

さあ、みんなで仲良く楽しく見つけよう！』
とのことだ。

「クッソ・・・！仲良く楽しく宝探し？ホントかよ！ 嫌な予感しかしねえよ！」

カナメは嘆いた。しかし、すぐに冷静さを取り戻し、シユカに連絡を入れようとする。が、圏外。アンテナは立っているにも関わらずだ。

仕方なく、Dゲームのチャットで連絡を入れる。

『シブヤセントラルタラワーっていうホテルに飛ばされたらしい。そっちは今どこだ?』と。

途端、画面にこう現れる。

『第一回リング配布時間です。』

リング300個がイベントエリア全域に配置されました!

地図と異次元カメラを使って探しましょう!』
と。

この配布されたリングを3つ集めないとゲームオーバーということらしい。しかし、倍率は三倍。まあ、第一回ということは二回もあると考えることもできるので、これをどう取るかは、個人差があるだろう。

地図を出すと、丸い表記がある。細かい位置までは分からないが、恐らくこれがリングの位置だろう。

その細かい位置がわかるのが勝手に追加されていた異次元カメラというアプリだろう。

「なんだこれ・・・?」

異次元カメラ越しにシブヤの街を見下ろすと、あらゆるところが光っていた。しかし、廃墟になっている。これがゲームの趣旨だろうか?

ベッドの下にもあったので、それを取ると、鉄の輪っかが落ちていた。異次元カメラ越しに見たら腕輪に見えるようだ。

リングの種類はルビー。つまり500ポイントと交換。詰まる所一個5000万円ということだ。

カナメがリングを取ったとほぼ同時。あらゆるプレイヤーが動き出していた中、既に三つ集めていたプレイヤーがいる。

「お前が・・・」

「さあ、どうでしょうねえ。君と同じ異能シギルなんてあるかもしれないじゃないか」

死体はすぐに芸術のように穴ぼこになって消えた。これがダーウィンスゲームの特徴だ。死んだら部分部分で転送されていき、死に至る。否、もしかしたらどこかに飛ばされているのかもしれない。しかし、それは彼の知るところではない。

シブヤ駅の影に隠れて顔はうまく見えず、くくくと笑う声しか聞こえない。

「これ、数字が書いてあるなあ。ユーリ、わかる？」

「・・・モース硬度。それはルビー」

隣にいた幼い少女が呟く。幼女の髪は薄緑色で、青い目をしている。背丈は小学生と左程大差無いだろう。

「へえ、じゃあ他のも探さなきゃね。ね、ユーリ、どこがいいと思う？」

「シブヤセントラルタワー」

うん、それがいい、と男は返答し、外へ出る。鎖で。

対面

レインと手を組むことを決めたカナメ。仲間を見つけ、否、まともなプレイヤーを見つけただけなのか、安心感からか、心の油断が一瞬あったのかもしれない。

ふう、と息をついた瞬間、異次元カメラを覗いていたレインが告げた。

「誰かがこちらにきています」

レインの忠告に反応し、先ほど見たマシンガンを手には、警戒を続ける。が、一向に敵が見えない。

「誰だ！ 異次元カメラで見えているぞ！」

足が震えるが、しかし、大丈夫だ。そう心に言い聞かせて、見えぬ敵に威勢を張る。この武器の恐ろしさはたつたさつき実感した。

と、途端に目の前に仮面をかぶった男と少女、否、幼女と言っても過言ではない背丈の女が現れる。目の前に、突然にだ。しかし、これをカナメは知っている。昨日戦ったバンダ君が使っていた透明になる異能シギルというやつだ。

「おっと、警戒されちゃったみたいだね。落ち着いてよ。敵意はないから」

男はおどけるおどけるように両手を上げてへらへらと笑う。

「仮面の男・・・」

「気を付けてください。彼はカイン。敵の異能シギルをコピーします」

「マジかよ？ 厄介じゃねえか」

「あ、その情報違うよ」

レインの忠告に答えるとカインと呼ばれた男が否定するのどちらが早いのか。今はそんなことはどうでもいい。レインの情報が間違えたことが第一の問題だ。

「僕の異能シギル、無名アラン・スミシの巨匠は『知っている異能シギルを使える』。だから敵じゃなくてもいいんだよ。レインちゃん」

「余計厄介じゃないですか」

「だから敵意はないんだって。むしろ仲良くしたいんだよ。このゲー

ムは敵対してばつかじや勝てないからね。協力も時には大切だからね」

「おっ、話が分かるじゃねーか」

カナメの警戒心が解け、銃口が下を向く。

「敵意がないことは分かりました。ですが、幼女誘拐はあまり・・・」

レインが呟く。

「誘拐じゃないって。うちの克蘭のメンバー」

「ユーリ。異能^{シキル}電脳^{ノイマン}の王よろしく」

幼女、ユーリはとてとと歩いていき手を伸ばす。その先にいたカナメは少しぽかんとしたが、すぐに我に返り笑顔で伸ばされた手を握った。

「よし。これで友好関係は築けたね」

「ところで、どうやってここに来たんだ？ 階段は封鎖されてるし、エ

レベーターは罠だらけだし」

「壁を伝って・・・と、それよりもヤバイよ」

カインは素早く身を隠し、二人を呼ぶ。

「連中、まだ生きてるってのか!？」

「そういうこと。じゃあ、僕と仲良くなるのがどれだけいいことなのか、教えてあげるよ」

途端、目の前からカインが消える。

「あれは、^{ベルゼブブ}虚空の王ですね。本当、味方でよかったです。今のうちにどうするか考えましょう。ユーリさんは何ができるんですか？」

「ネットと脳を繋げることが出来る。情報なら任せて」

ふふん、と胸を張る。背丈が小学生程度なので愛らしさしか感じない。

「敵の数は4人。カインなら大丈夫」

「同感です。彼なら任せて大丈夫でしょう」

「そんなに強いのか？ カインってやつ」

唯一話についていけないカナメに、レインが教える。

「彼は克蘭『ネームレス』のリーダーで、雪蘭に続いてランク2位のプレイヤーです」

「マジかよ」

「レインの言う通り」

再びユーリがふふんと胸を張る。

「さて、俺らは花屋の居場所指定だな。それと、できれば対策も……」

「恐らく一階かと」

「まあ、確かにそうだな」

「カインに聞いてみる」

言つて、ユーリがカインに克蘭チャットで『花屋の居場所分かる？多分一階』と送つてみた。

「何か頼りっぱなしで悪いな」

「元々中立の克蘭。困った人は助ける。殺す時は殺すけど」

「そ、そうか」

殺す時は殺す、に少し反応したカナメだったが、その姿勢もこのゲームでは致し方ないと思ひ直すことにした。

『企鵝眼サイドアイで見してみる。後、1人逃がしたからそつちでよろしく』と返信が返つてきた。

「おいおい、逃したつて大丈夫かよ!？」

「一人くらいなら大丈夫です。私の世界関数ラブラスで何とかかなります」

三人はとりあえず花屋の影響が及んでいない上階に上ることにした。

「なあ、これ逃げ場バレてねえか!? ほら、監視カメラが……」

「安心して。私の電脳ノイマンの王で監視カメラの映像はシャットダウンしてあるから」

それからしばらくして、カインからチャットが送られてきた。

『場所が分かった。警備室だよ』

「なるほど……行く方法は一つだけだな」

「何考えてるんですか。八割方死にますよ」

「馬鹿のすること」

そう。カナメの考えているその方法は、生存率は決して高くない。それは世界関数ラブラスと電脳ノイマンの王が告げているのだから確率の計算ミスで

はない。

「でも、それしかないだろう?」

「まあ、それもそうですが・・・」

「あとは覚悟を決めるだけだ」

カインが敵を、三人が策を実行せんとしている中、花屋は困惑していた。

突如現れた日本トップレベルのクランリーダー、カイン。そして、突如停止した監視カメラの映像。

何が起きている!?

そう思うしかなかった。

しかし、すぐさま冷静に戻り、停止していない25階以下で彼らを探す。上が駄目なら下を見るしかなかるう。

すると、15階に男の姿が見えた。

なぜ!? まさか外壁を伝ってきたのか!?

しかし、それしか考えられない。階段は封鎖しているし、エレベーターには罠を張っている。しかし、流石に外壁には罠を張っていなかった。そもそも、人間にそんな覚悟があるとは考えていなかった。

花屋とカナメが一触即発の状態に陥っている中、カインは何とか三人を荆棘クインオブソーンの女王で麻縄で縛り上げ、事なきをえたが、一人を取り逃がしてしまった。

「大丈夫かなあ。まあ、ユーリなら大丈夫でしょ」

ユーリは背丈からもわかる通りまだ小学生だ。小学生の折れそうな手では銃を放つのは危険がありすぎるし、刀を持たせるにも重たいと不満を言う。

なので戦闘には滅多に出てこないが、敵のかく乱となれば話は別だ。半径100mにも及ぶその異能シキルは『電子機器を操作する』というものだ。監視カメラを使っていた花屋、否、ヒイラギ イチロウからしたら災害そのものだろう。

さて、次は何をしようか。

操られ人形

シブヤ駅に到着すると、既に気付いているのか、それとも偶然転送先がここだったのか、一人の女性が立っていた。

気配を消して、女性の元へ近づく。

「あれはユカリ。気を付けて、強い」

了解、と言葉を返して、カインはユーリを隠し、女性の前へ出る。

「誰がひそひそやってんのかと思つたら・・・あんたか。仮面の男」

「やだなあ。僕にはカインって名前があるんだよ。君は何がお目当てでDゲームをやってるのかな?」

「は? 聞くまでもないでしょ。金目当てよ。金目当て。それ以外に何があるっていうのよ」

その言葉を聞いて、はあ、とため息を吐くカイン。

「返答次第では逃がしたのに・・・いや、僕は嘘を見抜けるから意味ないか。じゃあ、無抵抗になるまでやろうか」

「アタシの異能知^{シキル}つてる上で言ってるんだつたら、相当馬鹿だね。アタシ」

どちらからともなく、戦闘へと入る。その合図は無し。跳躍で距離を詰めるユカリに対し、カインは後ろへと跳ぶ。そのまま仲間の異能^{シキル}を使って半径2 m内に先端の尖った木の棒を出現させる。それを豪速で飛ばし、腕へ突き刺し、そのまま壁に張り付ける。

「うわあ、痛そう」

他人事のように呟くユカリを見て、改めて彼女の強さを再確認する。

トウライトマリオネット
蛇蝎なる絡繰

自分を意のままに操るといふものだ。そこに、痛覚なるものはない。自身を三人称視点で操る。まさしく操り人形だ。それを行動不能にする、というのがどれほど難しいか改めて再確認する。

ユカリは血が噴き出るのも無視し、木の棒を抜き取り、投げ捨て、そのままこちらへ走り出す。やはり痛みで抑え付けるのは無理だったか。ならば、物理的に止めるしかない。

カインは異能^{シギル}を切り替え、虚空^{ベルゼブブ}の王へと切り替える。

「ごめんけど、足、切り落とさせてもらおうよ」

すぐさまユカリの後方に瞬間移動し、両足を太ももから切り落とす。

「あれ？」

痛覚がないためか、それに気づかず一步先へ踏み出したユカリがごとんと倒れる。断面からは白い骨がよく見える。

「うわあ、でも無駄あ」

にやあと不気味に笑ったユカリは切断された両足へと断面から白い糸を伸ばし、何事もなかったかのように繋げる。

「人形は直せばいいんだよ」

「それ知らなかったなあ。いやあ恐ろしい」

彼女の異能^{シギル}は前々から知っていた。だが、カインの無名^{アラン・スミシー}の巨匠は知っている異能^{シギル}を知っている用途で使うことができる。なので、知らないことはたとえその異能^{シギル}自体を取得していたとしても使うことができないのだ。

だが、切断もだめなら、物理的に縛ってしまえばいい。

今度は異能^{シギル}を摩利支天^{ハレーシヨングースト}に変更し、二体の分身を出現させ、ユカリへと向かわせる。

それをするりと体をくねらせてするりと回避する。明らかに異常な体のくねりを見せたが、関節を外しているのだろう。骨折していても攻撃を止めないところは、バーサーカーかのようなのだ。

「痛そうだなあ。君のは知ってても使いたくないよ」

「そりゃ、アタシだから出来るからね。こんな芸当」

伸ばした右腕を、カインは右側へ避ける。だがしかし、突き出した拳が追尾してきた。何事か、と一瞬困惑したが、すぐに理解した。

肘が逆に折れ曲がっているのだ。ボキリと鈍い音が鳴るのも無視し、彼女はカインを仕留めるためだけに凶行に及んだのだ。

回避しきれず、腹部に強烈な打撃をもらう。

「もらった」

胃の中のを吐き出しそうになるのを抑え、ニヤリと笑う。

ユカリの右腕を腹部から突き出た二本の腕ががちりと拳を掴んでいた。

ハレーシヨンゴースト
摩利支天の応用技だ。分身を腕のみにさせ、皮膚から出現させる。

「今痛覚を戻したらどうなると思う?」

「そ、それは・・・」

彼女の異能シギルの痛覚に関しては実験済みだ。異能シギルを解除した瞬間に全ての痛みが襲ってくる。時間経過によって弱まりはするものの、完全に消えるには、切断された場合三時間。棒によって貫かれた場合は一時間程。

そして、カインの知る中には異能シギルを無効化する異能シギルも存在するのだ。果たして彼は今元気にやっているだろうか・・・否、それは関係なかったか。

「抵抗しないなら治してあげる。どうする?」

「わ、分かった。分かったからそれだけは止めて」

先ほどまでの威勢ある表情はどこへやら。恐怖に怯えるユカリは左手を上げる。

ヒーリンググレイス
薬師恩寵で雑につなぎとめていた足、腕にぽっかり空いた穴を治す。

「あ、あんがと」

「いいよ。僕たちは中立だからね。ユーリ。もう出てきてもいいよ。もし敵意を一瞬でも向けたら殺す準備は出来てるから」

「分かった」

陰に隠れて終わりを待っていたユーリが顔を出す。

「カイン。怖い顔しないで」

「ごめんねえ。ついつい頑張っちゃって」

仮面で見えないはずの表情を指摘するあたり、どれだけ付き添ってきたかがわかる。

「さて、君はここに転送されたの?」

「そ、そうだよ。リングが目的なら、ほら」

「いや、リングはいい」

「は？　これが優勝方法じゃないの？」

「それがね。そうだと楽だったんだけど、どうもそうじゃないみたいだ」

「どういうことだよ・・・」

「ま、君に話すなんて無駄なことではないよ。じゃあ、もう二度と会わないことを祈っているよ」

「アタシもだよ。アンタと戦うなんて二度と御免だね」

びつと中指を立てたユカリはそのまま唾を線路上に吐きつけ、シブヤ駅を去る。

「さて、と。次の来客は・・・ああ、厄介だな」

「あれは面倒。援護呼ぶ？」

「いいよ。リカとカオルはまだ休憩中だし、サツキはまだ関西に出てるでしょ？」

「・・・分かった。でも、怪我はしないで」

「あいよー」